

# 遊美

- 1 助川 睦枝さんの作品と作品についての言葉
- 2 作家探訪 入江 英子先生
- 3 学芸員に聞く 木澤 紗羅 学芸員
- 4 美に遊ぶ
- 5 友の会2023年新春講演会 「速水御舟」展を観て
- 6 心に残る私の一点 理事会・代議員会報告あとがき



## 助川 睦枝「老木に咲く花」

2008年／パステル用ボード・パステル／F20号

長い間共に暮らしてきた猫が、すっかり弱りました。

パステル画を描きはじめてから、猫の絵を描く楽しみを見つけました。今まで気づかなかった猫の表情に、感情の高ぶりやほしい物をねだる声などと一緒に、微妙な顔の変化を見ることが深くなりました。スケッチすると、いい線をとらえることができうれしくなります。その猫の命が終わってしまうことを考えると、必死になりました。

その姿を描きました。猫の最後の姿を、ふっくらと真っ白にしました。私は梅の木になって、猫を抱くように枝をのぼし花を咲かせました。長い長い間、パステル画教室で指導していただいたのは七字純子先生です。人の心を動かすことのできる心を持った先生と出会ったことに深く感謝致しております（先生は現在茨城県芸術祭美術展覧会の委員でデザイン部門の審査員を務めていらっしゃいます）。

（那珂市在住）



洋画家

入江 英子先生を訪ねて

## 創作しつつ生活しつつ

入江先生のアトリエは太平洋を望む日立市の高台にある。大きな窓から春の光が入るリビングでお話を伺った。

先生は鳥根県江津市のお生まれ。絵を描くのが好きだった少女は、自然に美術系の大学を目指した。岡山大学の特設美術科に進まれ、在学中19歳で東光会初入選を果たす。卒業後3年間中学校の美術教師を経験され、結婚して日立に。

日立に移られてからずっと、制作はもちろん、子供たちの絵画教室を続けてきたという。3人のお子さんの子育ての時期も休むことなく。多いときは15人ずつ週2回の教室は「楽しかった」とおっしゃる。今では大人の生徒さんも。中には30年通い続けている94歳のご婦人もいるという。その一方で決

して制作の手を緩めなかったことは、数々の受賞歴からはっきりと見える。東光会の研究会で学び、時には制作中の作品と前の作品を並べて置いて、競争させることがあったという。以前の自分を超えるために。

先生が若いころからもうひとつ続けられていることが、友の会との関わりだ。婦人之友という雑誌の愛読者の集まりとして発足した全国友の会は、よい家庭をつくり、社会へ広がることを願い学びあう会で、東日本大震災の後には盛岡友の会の三陸被災地域への継続した支援が話題になったことを筆者も憶えている。友の会に入ったきっかけを尋ねると、この家庭は何か違うな、すてきなと感じたのが友の会の方だったとおっしゃる。お忙しい中続けてこられたのはどうも「私一度始めたことはやめないんです」と。絵画制作と友の会は車の両輪だという。

制作活動しながらも日々の暮らしを大切に願って進んでこられた先生を、側でずっと応援し続けていらした夫君とは、一緒に登山をされてきた。アトリエの壁に飾られた山の絵は、夫君との山旅の産物だという。

アトリエの棚には、豆スケッチブックが20冊ほど並んでいた。聞けば、50代になって行った仲間とのイタリアへのスケッチ旅行の

時、絵日記のようにして車窓からの風景、訪れた場所などを描いたのが始まりという。中の一冊には、丹念に描かれ、色も付けられた食事の絵があった。50代後半に大病を思い、頭部の手術をしなければならなかった入院中の食事の記録だった。困難を乗り越える強い意思と共に、どんな時も描くことをやめない姿を見た。その積み重ねが色や形だけではないストックとなっていて、描くときの手助けとなり、厚みとして画面に現れるのかと想像する。

手術の後10年は日展入賞がなかったとおっしゃる。鳥根のお母様の介護も重なり、筆を折ろうかと悩んだのは、この時だけだった。その後先生が完全復活を遂げ、さらに前進を続けているの言うまでもない。

近年は、故郷で再発見した納屋をモチーフにしている先生の言葉を紹介する。「いつまでも感動する気持ちを持ち続けること、恨気強く描写力を磨くこと、モチーフは目の前にあるのだから。」

イーゼルに掛かっていた制作中の絵は、5月の東光会に出展する100号の作品。うしろの壁には、尊敬する東光会の森田茂先生、佐藤哲先生、江藤哲先生の3人の展覧会ポスターが貼ってあった。「私もこんな絵が描けたらいいと思って」。



「卓上静物」  
1995年/油彩・カンヴァス/F100号  
第27回日展



「厩屋」  
2007年/油彩・カンヴァス/F100号  
第74回東光展会員賞



「庭に遊ぶ」  
2022年/油彩・カンヴァス/F100号  
第9回改組新日展

入江 英子(いりえ えいこ)

- 1942 鳥根県に生まれる
- 1961 東光会初入選
- 1965 岡山大学教育学部特設美術科卒業
- 1966 東光会会友執筆
- 1972-1978 日立市展 市長賞受賞
- 1980 茨城県芸術祭美術展 会友賞受賞
- 1983 東光会会友執筆

- 1988 東光展 女流筆賞受賞
- 1989 上野の春大賞入選(以後入選8回)
- 1990 東光会海外選抜展入選(ベトナム展、ボストン展、リヨン展、大連展)
- 1993 日展初入選
- 北星研究所「人間賛歌大賞展」入選・入賞(3回入選)
- 東光会美術会員展(以後4回出品)

- 2007 東光展会員賞 受賞
- 2022 日展・改組新日展 入選13回

現在 日展会友  
社団法人東光会会員・審査委員  
茨城県展覧会会員・審査委員  
アトリエ 日立市霞吹町1-29-2



木澤沙羅学芸員

余裕ができれば  
キックボクシングを  
やってみたい(!?)

学芸員

木澤 沙羅 さん

五浦美術館で、7月22日から開催される企画展「岡倉天心『東洋の理想』から120年 天心と画家たちのアジア」ご担当の木澤学芸員をインタビューした。

## 1. 学芸員を目差す

小さいころから絵を描くことが好きで、小4の時「いしかわ教育の日」で、小学生の部水彩画で最優秀賞を受賞した。また、ピアノ教室を開く母に幼い頃からピアノを習った。ある時母から「学芸員」の話聞き、小6の頃から学芸員の仕事に憧れを持った。一方、小1から父の勧めで少林寺拳法を習い自己を鍛え、後の大学では少林寺拳法部で主将を務めるほどに。文武両道の親の教育の下、学芸員目標の道を進んだ。高校の美術部で、筑波大の教育実習生から進んだ大学の教育や、オープンキャンパスでの学生の謙虚な姿勢に感銘を受け、筑波大に進学。石川県から居を移した。

日本の近代美術を専攻した理由は、作家が自分と同じ日本語を使っているほうが作家に共感しやすく、また、作家に関して資料が多く残ることによる。卒業論文で、「日本美術院における音曲面題について」を著し、岡倉天心について造詣を深めた。一方、学芸員の採用枠が極めて少なく諦めかけていたところ、大学院1年の時、教授から五浦美術館の紹介があった。まさに、「Ask it shall be given you」である。昨年4月から、大学院を休学し夢の学芸員の道を進

み始めた。その夏、採用試験に合格し今年4月から正式に学芸員となり夢を叶えた。

## 2. 二刀流

学芸員としての最初の仕事が、冒頭述べた企画展の実施。来年度からは学芸員と大学院生の二刀流が始まる。「無理をしても、やれる時にやる」、筆者はこれをととても大事と思う。拍手!!

前期博士課程の論文では、木村武山「阿房劫火」を研究する。木澤さんの年齢に少し重ねた時の武山の意欲作をどう論じるのが楽しみ。是非、論文要約を『游美』で紹介くださることを願う。更に、後期課程に進み、二刀流を続けながら、見応えのある企画展を実施していただきたい。

## 3. 一驚

大学まで続けられた少林寺拳法は、今は余裕がなくお休み中とのこと。驚いた言葉に、「余裕ができれば、キックボクシングをやりたい」と。お話を伺う木澤さんと少林寺拳法が繋がらない上、キックボクシングとはまったく一驚。二刀流の多忙な木澤さんには恐らく無理であろうと思うが、そのくらいの余裕を持たれることを期待する。

## 4. 企画展の見所

初主担当される前記企画展について見所を伺った。「天心の資料も展示。作品の中に天心の教えが生かされている。作品単体では理解することが難しいですが、作品と資料から、天心の理想と作品がどう関わっているか観ていただきたい」と希望を述べられた。難解な英文著作「東洋の理想」と作品の関係をどのように分かり易く展示・解説してくださるか楽しみである。作品及び書簡の配置等学芸員としての配慮も拝見したい。会員の皆様、ぜひご鑑賞ください。

最後に、個人的に好きな画家・作品を伺った。「素直な人間性が作品に表われている奥村土牛や、田淵俊夫が好き。土牛の『鳴門』は素晴らしい」。

ご自分の道を開き進まれる木澤さんのお話を伺い、老い心の若返る思いがした。



木村武山「阿房劫火」/1907年/絹本・彩色・軸装  
141×240.8cm/第1回文展3等賞/茨城県近代美術館蔵



橋本雅邦「権摩居士」/1885年頃/紙本・彩色・軸装  
131×60cm/茨城県近代美術館蔵

2作は木澤さん担当の企画展で展示



奥村土牛「鳴門」  
1950年  
紙本・彩色・軸装  
128.5×160.5cm  
山極美術館蔵

### ◆「鳴門」が展示される展覧会◆

【特別展】日本画聖地道礼一舟舟の名僧散椿、魁鳳の年著る、土牛の鳴門(仮称)  
会場：山極美術館  
会期：2023年9月30日(土)～11月26日(日)  
開館時間：午前10時～午後5時(入館は午後4時30分まで)  
休館日：月曜日[10/9]は閉館、10/10(火)は休館!



荒川 眞理子

絵本『いのくまさん』は猪熊弦一郎（1902-1993）の幼少時から晩年までの作品の魅力を谷川俊太郎の言葉がわかりやすく伝えてくれる。『猪熊弦一郎展』はこの絵本に添うように、さらに多くの作品が展示されていた。

私の猪熊さん“推し”は半世紀以上。開催を心待ちにしていた。早々に足を運び、ワクワクしながら行きつ戻りつゆっくりと鑑賞する。ミュージアムショップで『いのくまさん』『猪熊弦一郎のおもちゃ箱』『私の履歴書』を手に入れた。

3冊を読み比べ、年代に沿って作品を追っていくと、猪熊さんの制作に挑む情熱、芸術に対する哲学や葛藤の変遷が見えてくる。戦前のパリではピカソ、マチスと出会い、フジタ、イサムノグチらと親交を深めた。戦後はニューヨークの魅力にガチっとなつかまってしまう、“古い上着を脱ぎ捨て”新しい世界に挑戦し、マーク・ロスコやジャスパー・ジョーンズとも交流した。それらの出会いは猪熊さんの芸術を探究するエネルギーの磁場に、集まるべくして巡り合った運命であったのだろう。

で、もう一度美術館に。先日とはまた違う感激がある。どの時期の作品も、私は好きだ。表現の新

たな挑戦は、90歳を超えても瑞々しく続いていた。それはどの年代の写真を見ても、猪熊さんの瞳の輝きが少年の頃と全く変わっていないからなのだろうかと思った。

作品の海を漂いながら至福の時を過ごしていると、様々なことが思い出された。そう、猪熊さんの姪（文子夫人の弟の長女）が大学の友人であった。ニューヨークで活動されている頃のこと、文子夫人がニューヨークから美しい小物や菓子などを送ってくれるのだと話していた。よく教室でおやつのお相伴に預かったものである。

1975年頃だったと思う。猪熊さんはニューヨークを離れ田園調布とハワイのアトリエで制作をされており、文子夫人の弟家族が田園調布の家に共に住んでいた。友人が北欧の機織り機を取り寄せたので見てこないか、と声をかけてくれた。二世帯の住居は真っ白で大きくモダンな建物であった。茨城県近代美術館の設計者吉村順三の建築と後で知ることになるのだが、明るくて居心地の良い家であったことは50年近く昔のことであるがよく覚えている。機織り機は大きすぎて自室に収まらずおじさんのアトリエに置かせてもらっている、というのだ。猪熊さんのアトリエである。恐

る恐るお邪魔すると、明るくて広いその空間で製作中の猪熊さんは、柔らかな笑顔で迎えてくださった。会場入り口に飾られた大きなポートレートと同じ笑顔であった。

夏になるとその友人は軽井沢の“おじさんの別荘”に滞在しながら脇田和美美術館でアルバイトをしているので、遊びに来ないかと誘ってくれた。そこは谷口吉郎設計の“画架の森”といわれた長屋形式の別荘で、谷口氏ははじめ何人かの錚々たる御仁が所有していた。天然の木材で造られた部屋は可愛らしい山小屋のようだったと記憶している。脇田和、吉村順三、谷口吉郎各氏は猪熊と共に新制作協会員である。

20数年前になるが、脇田和美美術館で谷川俊太郎の詩の朗読会が開かれた。親しかった武満徹の形見のジャケットを着て朗読されていた。美術館は吉村順三設計の別荘に隣設している。ぐるっと回ってキラ星の如く素敵な才能が猪熊さんと繋がっているのだと改めて気づき、その凄さにくらっと眩暈がした。友人を通して猪熊さんの作品を少し近から鑑賞できたことは幸せであった。もう一度、美術館へ猪熊さんに会いに行ってきた。（水戸市在住）



猪熊弦一郎「サクラボン」/1939年  
油彩・カンヴァス、80.4×65.4cm



猪熊弦一郎「マドモアゼルM」/1940年  
油彩・カンヴァス、81.2×65.4cm  
猪熊弦一郎昭和第1回油画発表展(1941年)



猪熊弦一郎「金環画」/1987年  
アクリル・カンヴァス  
152.0×120.9cm

新型コロナウイルスの感染状況が落ち着きを見せる中、公益財団法人二科会常務理事、県芸術祭展覧会委員の山中宣明氏と友の会顧問、サザコーヒー代表取締役会長の鈴木誉志男氏の講演会を2月19日(日) 13:30から近代美術館会議室で開催しました。

最初に、鈴木氏より「コーヒーの歴史と裏話」と題する講演がありました。世界でコーヒーがどのようにして発展したか、また日本でいつ頃からどのような人々に飲まれるようになったかなど、コーヒーにまつわる面白いエピソードをいれながら、コーヒーを愛する鈴木氏ならではの講話でした。

続いて休憩を兼ねて講座室でコーヒータイムがありました。鈴木顧問から差し入れのサザコーヒーを頂きながら、会員同士の親睦を図りました。

次に山中宣明氏より「美の原理をさぐる -色彩・構図・素材と技法-」と題する講演がありました。山中氏は慶応義塾大学美術史東洋美術史専



山中先生講演会

攻を卒業後、二科展を中心に活動されており、山中ブルーと称される独特の色彩感覚の抽象画が高く評価され、第89回二科展絵画部門で内閣総理大臣賞を受賞されています。山中氏はその幅広い知識から絵画の美の原理、人に感動を与える色彩、絵画の構図、利用される素材の変遷などについて、わかりやすく講演されました。

51名の方に参加いただき、和やかで有意義な講演会となりました。参加者からこのような小さな講演会を次回も開催してほしいとの声が寄せられましたので、企画委員会で検討していきたいと思います。

## 「速水御舟」展を観て

2023年2月21日～3月26日

灰原 啓子

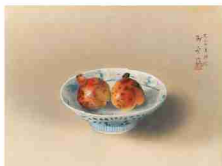
美術展のポスターというのは実に魅力的です。作品の選定が素晴らしいのはもちろん、意図が良いです。短い言葉でありながらぐっと引きつける力があります。この展示を見逃したらさぞや悔やむことになるだろうと思ってしまうような力がポスターにはあると思います。今回の意図「実在するものは美でもなく醜でもない、唯<sup>まじ</sup>真実のみだ」もそうでした。

この度の速水御舟展は、「鶴島の皿に柘榴」がポスターになっていました。緻密な描写が印象的な美しい作品です。御舟はこの作品が象徴する写実描写にとどまることなく様々に画風を転じていきます。今回はその変化の様子が一堂に鑑賞できる貴重な展示であるとメディアなどでも紹介されていました。本画約100点の展示というボリュームも話題でした。

御舟展では、三章からなる構成でその挑戦と転機と探求をわかりやすく見ることができました。本場に一人の画家が描いたのだらうかと疑いたくなるような作品群は見応えがありました。御舟は14歳から絵筆を持ち、17歳には数々の賞を取り頭角を現し始めるという稀代の才能を持っていました。次々と画

風を研究し、常に挑戦者の心を貫いていく生涯でした。40歳という短命ではありましたが、とても濃密な生涯であったといえるかもしれません。その魂の気迫に圧倒されました。

SNS上では「速水御舟展 茨城県近代美術館」というキーワードですらりと検索結果が出てその注目度がよくわかりました。地方では15年ぶりという貴重な展示を茨城で開催できたことは大変素晴らしいことです。近代美術館のこれからの展示もとても楽しみます。(水戸市在住)

速水御舟「鶴島の皿に柘榴」/1921年  
絹本彩色・額/36.8×49.5cm/個人蔵



岡山県美作地方のひとつきわ開けた盆地に昔ながらの城下町がある。津山だ。ここに古い医院を改修した個人美術館<sup>®</sup>があって、2011年に91歳で没した河野磐の作品を展示している。津山市観光協会のホームページによると、1950年の東光展受賞（当時唯一の最高賞）や1991年の東光会ベルリン展金賞を受賞するなど、河野は教員生活の傍ら画業にも確かな足跡を残している。

「リハーサルの日」はその数多い展示作品の一つだが、実は私はこのモチーフの元となった現場に居合わせていたばかりか、その後、次第に完成へと向かう制作過程を垣間見ている。と言うのは45年前、学生演劇のリハーサルで、舞台上のヒロインが観客席の顧問兼演出監督でもある河野と話す、まさにその脇に、私も出演者の一人として立っていたからだ。そして毎週末のように河野の自宅に泊まり込んでいた私には、四畳半ほどの小さな部屋でこの大作が次第に出来上がっていくのが、どうにも不思議でならなかった。

河野は私に実に雑多な事、黒沢映画や新劇の歴史、

中国での兵役経験、ブロードウェイミュージカル、果てはコメのとき方からサラダの作り方まで教えてくれた。私は今でも河野に出会わなかったら、これほど好奇心旺盛な人間にはならなかった気がするが、なぜか私には絵画は止めておきなさいと言った。その真意は全く不明のままだが、退職後の現在、言いつけを破って下手な作画を楽しんでいる。いつか、こんな絵を描きたいと願いつつ……。 （水戸市在住）

※編集者注 河野美術館 〒708-0835 津山市勝間田町16  
<http://tsuyama-city.musicfactor.jp/kouno/>



河野磐「リハーサルの日」  
油彩・カンヴァス/F10号  
1978年東光展/河野美術館蔵

## 理事会・代議員会報告

2023年5月13日（土）に理事会及び代議員会が開催されました。

中川会長の挨拶の後、金澤宏副館長の挨拶と新任副参事兼課長の中島弘江管理課長と中田智則企画課長の紹介がありました。

理事会では、役員の変更と2022年度決算等が承認されました。

代議員会では、2022年度経過報告、事業報告、決算報告、監査報告に続いて、2023年度事業計画案と予算案について協議が行われ、いずれも承認されました。

2023年度事業計画において、企画委員会で新型コロナウイルスの状況を見ながら、海外旅行や宿泊を伴う美術鑑賞旅行について検討することとしました。また、美術講習会や講演会についても昨年度と同等の規模で計画いたします。会報委員会では例年同様、会報「游美」を年3回発行いたします。PR委員会ではホームページを随時更新するとともに、新規会員募集の方法について検討してまいります。

2023年度も会員の皆様のご理解・ご協力をよろしくお願い申し上げます。なお、役員・委員及び法人・特別会員は、次号（104号）に掲載します。

## あとがき

○コロナ禍の不安な暗いトンネルを抜けて、注意を払いながらではあるものの通常の社会生活に戻りつつあります。5月13日、2023年度友の会代議員会が開かれ、今年度の事業計画が承認されて新しいスタートを切りました。6月には春の美術鑑賞旅行の実施、友の会行事も動き始めました。103号「游美」は、会員皆様との交流を深めるべく明るく見通しをもった発行にしたいと願っています。

○本号では、画像の掲載及びデータ

の貸与に関して下記の各氏から許可をいただきました。

厚くお礼申し上げます。

- ・猪熊弦一郎展の画像データを、当美術館 首席学芸員山口和子氏
- ・速水御舟の「鍋島の血に柘榴」の画像データを、当美術館 首席学芸員澤渡麻里氏
- ・木村武山「阿房劫火」、橋本雅邦「維摩居士」の画像掲載許可及びデータの貸与を、天心記念五浦美術館 学芸員水澤沙羅氏
- ・奥村土牛「鴉門」の画像掲載許可及びデータの貸与を、山種美術館 吉田業由氏

- ・河野磐「リハーサルの日」の画像掲載許可を、河野美術館 館長河野枝三子氏

以上の方々にも重ねてお礼申し上げます。

茨城県近代美術館 友の会会報

### 游美 No.103

発行 2023(令和5)年6月  
編集・発行 茨城県近代美術館友の会  
〒310-0831  
水戸市千波町東久保 666-1  
TEL:029-243-5111  
E-mail: fmomaibk@gmail.com  
HP : <https://fmoma.com/>

印刷 株式会社 光和印刷